

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	
Title(English)	Analysis of Changing Landscape of World Heritage Site for Heritage Management: Case of Luang Prabang, Lao People ' s Democratic Republic
著者(和文)	シリアル
Author(English)	CEELIA LEONG
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10685号, 授与年月日:2017年9月20日, 学位の種別:課程博士, 審査員:高田 潤一,山口 しのぶ,山下 幸彦,花岡 伸也,高木 泰士
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10685号, Conferred date:2017/9/20, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	Ceelia Leong	
論文審査員	氏 名	職 名	氏 名	職 名
	主査 高田 潤一	教授	高木 泰士	准教授
	山口しのぶ	教授		
	山下 幸彦	准教授		
	花岡 伸也	准教授		

本論文は“Analysis of Changing Landscape of World Heritage Site for Heritage Management: Case of Luang Prabang, Lao People's Democratic Republic”と題し、英文6章からなる。

第1章“Introduction”では、研究の背景として、歴史的都市景観 (historic urban landscape, HUL) の保存と観光開発への需要との間で往々にして軋轢が生じていることを述べ、後発途上国であるラオス人民民主共和国において最初に世界文化遺産として登録されたルアンパバーンでも同様の問題に直面していると述べている。文献調査により、既存の研究もしくは調査において観光開発がHULに与える影響について相矛盾する結論が得られていること、またHULの経時変化に関する空間的なパターンについて分析がなされていないことを指摘し、本研究の目的を世界遺産保存の観点から見たルアンパバーンにおける都市景観の経時変化の空間的な分析にあるとしている。

第2章“Literature Review”では、研究の枠組みを構築するために必要となる重要なコンセプトについて、文献調査を行っている。最初に遺産保存が時代を経てどのように変化したかを概観し、世界遺産に登録されることの得失、特に保存と観光開発との軋轢について議論している。そして、アジアの開発途上国における類似の先行事例を取り上げ、仮説を構築するとともに、ルアンパバーンを対象とした過去の文献から景観保存が成功しているとする言説・失敗しているとする言説を取り上げ要因を整理している。さらに分析手段となる地理情報システム (geographic information system, GIS) の開発途上国での導入および持続的な使用における課題についても概観している。最後に本研究で使用する分類尺度に対する統計的手法についても整理している。

第3章“Methodology”では、研究課題として、ルアンパバーン世界遺産局 (La Departement du Patrimoine Luang Prabang, DPL) において遺産保存のためのGISの持続的利用を実現するために必要な要素を明らかにすること、1999年から2009年の間にルアンパバーンの都市景観がどのような顕著な変化を遂げたかを明らかにすること、これらの顕著な変化が観光開発との間にどのような関係をもつのかを明らかにすること、を挙げ、これらを分析するための研究手法について述べている。主要な遺産建築物が集中しているメコン川とカン川に挟まれた半島状の6つの村を調査対象地域として、複数情報源からのデータを統合したGIS用ベース地図を作成し、遺産管理に関するマスタープランである遺産保全計画 (Plan de Sauvegard et de Mise en Valeur, PSMV) で定義された建築物に関する7つの属性について、DPLが過去に収集したデータおよび新たにDPLと共同の現地調査により取得したデータをGISに入力している。そして、各属性に対する主題図を用いた可視化および記述統計により空間分布および定量的な変化を分析している。さらに、ロジスティック回帰を用いて観光開発と景観変化の関係を分析している。そして、これらの分析結果の要因についてDPLの専門家および地元住民への聞き取り調査を行っている。

第4章“Results and Data Analysis”では、第3章の結果を述べている。まず、GISを使用するためのベース地図作成、データベース作成、データ収集の結果について紹介している。次に、GISを使用して7つの属性に関する空間的な分析を行い、住居から観光への用途変化、現代的様式からラオス伝統様式への変化、伝統的建材から現代的建材への変化、現代的屋根材から伝統的屋根材への変化、の4つの顕著な変化を見出している。これらの結果の要因について、DPL専門家とのワークショップ、および建築物所有者への聞き取り調査を行っている。そして、統計分析により、川岸における開発が他の地域に比べて顕著であること、また建築様式・建材・屋根材の変化がすべて観光開発と関係していることを明らかにするとともに、これらの変化がPSMVに則ったものであることを見出している。

第5章“Discussion”では、第4章で得られた結果を、既存の文献と比較して議論している。途上国におけるGISの持続的使用が困難であるとする文献が多数ある中で、本研究で構築したGISは2009年のDPLへの導入以来、現在まで継続的な利用と拡張が行われており、信頼できるベース地図の構築、人的資源に見合った適正な規模、利用者の継続的な研修と定期的なデータ更新などが持続可能性に寄与しているとしている。GISを用いた主題図による可視化および統計分析の結果は、多くの文献とは異なり、景観の変化がPSMVに則ったものであり劣化を生じていないこと、さらに、より具体的には、建築物の観光用途への変更が伝統的な建築様式や屋根材の増加に貢献し、景観の改善へとつながっていることを明らかにしていると述べている。

第6章“Conclusion”では、本論文を総括している。

以上を要するに、本論文は、開発途上国の世界文化遺産であるラオス人民民主共和国ルアンパバーンの都市景観の経時変化の空間的分析を実施し、その変化の要因を明らかにしたもので、学術上寄与するところが大きい。よって本論文が博士 (学術) の学位論文として十分価値あるものと認める。

注意: 「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。